大阪国税局長賞

お金じゃない価値を税金が支える

学校法人灘育英会灘中学校３年
高田　拓人

私の祖父は、富山にて「菅笠」というものを振興する活動をしている。菅笠は四百年の伝統を誇る日本の伝統工芸品であり、「越中福岡の菅笠製作技術」は、国の重要無形民俗文化財にも指定されている。

菅笠は、かつては雨除けや日除けとして日本中で広く使われていた。有名所で言えば、東海道五十三次などの浮世絵に登場する旅人や飛脚が、必ずといって良いほど頭に被っているのが菅笠である。このように、菅笠は、かつて全国各地どこでも使われているものだった。だが現在は、日常的には殆ど使われなくなってしまっている。需要は限定的だ。しかし、だからといって菅笠という伝統が失われて良いものなのだろうか。

確かに菅笠はお金にならないのかもしれない。だとしても、日本文化に四百年間ずっと寄り添ってきた菅笠の文化的価値は蔑ろにされるべきではないと思う。「実生活の役に立つ」とか「お金になる」とかだけでは語れない価値というものが世の中にはたくさんあるはずだ。しかしそうは言っても、需要が限定的となってしまいお金にならない伝統工芸品を守り、産業を盛り上げていくのは非常に難しい。時代に合わせて新商品を開発したり、ネット販売をしようとしたりしても、お金がかかる。そもそも維持していくだけでお金がかかってしまう。伝統を守るには、どうしてもお金の問題が立ちはだかるのである。そして税金にはそういった問題を解決する役目があるのだ。実際、例えば「伝統的工芸品産業支援補助金」という制度を通して、全国各地の伝統工芸品の事業の一部を国が補助している。令和三年には、「越中福岡の菅笠製作技術」の他にも百件近くの伝統工芸品がこの制度によって支えられている。日本の伝統が守り続けられているのは、税金のおかげなのである。

そして世の中には、伝統工芸品以外にも、「実生活の役に立つ」とか「お金になる」とかではないが、非常に重要な価値を持つものがたくさんある。例えば大学などで行われている科学研究も、殆どの場合、直接お金になることはないし、実生活の役に立つための研究ばかりではない。スポーツや芸術を振興しても、経済的なリターン自体はあまり見込めないだろうし、実生活の役に直接立つということも殆どないだろう。しかし、そのどれもが、文化や学問、伝統といった人類が築き上げてきた重要なものである。一方同時に、そのどれもが、お金がないと存続も発展もできないというのも事実だ。そして税金が、こういった様々な「お金じゃない価値」をお金の面から支えているのである。

私は将来、文化や学問、伝統といったものを守ることに直接関わることはないだろう。しかし直接関われなくても、納税を通して、そういった「お金じゃない価値」を守ることに貢献していきたいと思う。